



経歴

平成14年	4月	総務省採用
平成14年	10月	岐阜県市町村課・財政課
平成16年	4月	総務省大臣官房秘書課
平成17年	7月	同 自治財政局交付税課
平成19年	7月	同 大臣官房企画課
平成20年	6月	現職

心にリアリティを携えて

コーネル大学 近松 茂弘

Woody Guthrieの代表曲This Land Is Your Landは、第二のアメリカ国歌とも言われ、広くアメリカの人たちの間で親しまれています。素朴なメロディーのこの曲は、私の住むイサカの町の美しい風景と相まって、私にとってアメリカを代表する一曲になっています。

現在私は、アメリカ北東部のニューヨーク州イサカにあるコーネル大学で公共政策学を学んでいます。イサカは人口約3万人。コーネル大学は、アイビーリーグの中で唯一、都会から離れた小さな田舎町にあります。

この原稿を書くべく図書館の机に向かって思い返すと、私が総務省を志望し、地方自治を己の生業としたいと決めたのは、リアリティを重んじ、国・地方を通じた勤務経験によりそれを培っていくという総務省の組織としての姿勢が、これからの人生の中で常に心にリアリティを携えて仕事をしていきたいという私の思いに合致したからです。

大学に進学してからというもの、周囲の同級生たちと交わす議論の抽象度は格段に上がり、「大きな主語」(日本、我が国、我々…我々って誰だ?)を使って「スケールの大きな」話をすることが増えましたが、その一方でどうも足元がふわふわする思いを禁じませんでした。そんな中、総務省職員の人たちの話を聞く機会があり、地方自治体での公私にわたる多様にして豊富な経験を生き生きと語る姿、また、そうした一人一人の経験を元に、国としてどうあるべきかを熱く語る姿、そこに、単に「スケールの大きな」仕事を語るといっただけではない、日本という地に根を下ろしたリアリティを強く感じました。それが、私の総務省を選んだ理由です。

入省後、岐阜県、総務省での勤務を経た後にアメリカ留学を希望したのは、アメリカという、前提の全く異なる国を制度と社会の両面から実感し、社会に対する発想を豊かにしたいと感じたためです。当時、日本の行政制度におい

ては大きな改革が相次いでいました。例えば交付税課勤務時代には、三位一体の改革や新型交付税といった改革が山場を迎えており、既存の仕組みに対する自分の思い込みにとらわれない仕事が求められました。そうした変化の激しい日々を過ごすうち、アメリカで大きく異なった発想に基づく制度を学び、それを支える社会をリアリティをもって感じることで、より柔軟な頭で制度設計をできるようにになりたいと感じたのです。

大学院で学ぶこの国の制度はいずれも新鮮な視点を与えてくれます。Federalism(連邦制度)に基づく州政府の力の強さ、連邦政府と州政府の緊張関係は自分の想像を超えていましたし、実用性の色合いの強い自治体の存在には、同じ「自治体」という言葉の多様性に気づかれます。

学びの場は大学に留まりません。家族同士の交流を通じ、学生ではない、イサカに住む現地の人々とも深い交流ができていのは何よりの財産です。

秋、森の中の一軒屋で、たき火を囲みながら話が弾み中、隣の次男坊に目をやりながら、「この子もずっとホームスクーリングをするつもりなのよ。自分の納得する教育を受けさせてやりたいから」と事も無げに仰ったお母さん。「『大草原の小さな家』は、私たちにとってはそんなに昔の話という意識はないんですよ」と言いながら、特段の気負いもなく、電気も水道もない山奥で、あえて自給自足の生活をしているご家族。ガス会社の掘削によるカユガ湖の汚染問題のために住民委員会を結成し、声をあげる人々。

今ここで私が伝えたいのは、連邦制度、ホームスクーリング制度といった「制度」の詳細ではありません。私が伝えたいのは、「個々の制度以前に、個人としての自分がどう生きたいかという意思が存在する」という、アメリカの人々

の本能にも似た思いです。岐阜県という現場での経験、抽象的算式の中に現実を反映することを厳しく求められる交付税課での経験、それらにより培われたリアリティに対する感性は、今後何となく仕事で目にするであろう日米の制度比較をした表の仕切り線、そこに存在する見えないギャップを埋めるための想像力を与えてくれました。

この文章を読んでいる学生のみなさん、あなたが社会人になったとき、仕事における様々な場面で、大きな決断に迫られる瞬間が来るでしょう。その決断のとき、あなたは何をよりどころにしますか。豊かなリアリティの蓄積に支えられた、現実社会を想像する力が必要だと感じませんか。

楽天的なフォークソングにも聞こえるThis Land Is Your Landですが、実は1930年代の大恐慌のさなか、Guthrieが全米を放浪し、その経験を元に作られたものです。オバマ大統領の就任式典(Inaugural)でも歌われ、今なお人々の心を揺さぶるのは、そこにあるリアリティゆえではないでしょうか。もしあなたが将来、「大きな主語」を振り回すだけの政策ディベートを超えて、自分のこれまでの人生で培ったリアリティをかけて決断を下していく、そんな日々を送りたいのであれば、それは総務省にあると私は確信しています。

(写真上) Theodore J. Lowi 政治学教授、大親友の Matthew Mornick とともに



幼稚園にて、長男・次男・友人ご家族と(筆者左)



民間企業→総務省、そして海外へ

ミシガン大学 佐藤 輝彦

■民間企業からの転職

今からX年前、大学卒業後、某大手電機メーカーに入社し、電子政府といった公共部門の情報化関連の営業をしていた私は、上司や周りの仲間にも恵まれ、充実した社会人生活を送っていました。他方で、10年、20年先の「一社会人」としての今後の人生を長い目で見たとき、①やってきて良かったと本当に思えるような仕事、②5年、10年先を見据えた長期的な視点から仕事をしてみたいという葛藤が日々強くなるのを感じ、当時は非常に迷いましたが、思い切って退職して国家公務員に挑戦しようと決心しました。

■期待に違わない総務省という舞台

民間企業を退職した後も引き続き情報通信という将来性を秘めた世界に携わりたかった私は、幸いにも総務省に入省し、最初にデジタル・ディバイド(情報格差)解消に向けた基本的な戦略作りを担当する部署に配属されました。今や日常生活や社会経済活動にインターネットは当たり前のように使われるようになっており、その不可欠なインフラとなったブロードバンド。しかし過疎・離島地域については採算性の面から整備が進まず、放置しておけば更に地理的経済格差が広がっていく可能性があります。そのため、逼迫する国家財政を考慮しつつ、効率的なインフラ整備を促進するために民間企業、地方自治体、大学の先生方と一緒に知恵を絞りました。

入省して一番驚いたことは外部の方々や接する機会が大変多いことです。技術の進歩が非常に早く、通信事業者、メーカーあるいは消費者に至るまで多様なステークホルダーが存在する情報通信分野においては外部との頻繁な意見交換が政策形成の過程で大変重要であり、当事は末端の係員ながら、営業をしていた民間企業の頃より名刺の減るスピードが早

かった気がします。

その後秘書課での採用活動、財務省への出向を経て、国際機関を担当する部署へ。WTO(世界貿易機関)やEPA(経済連携協定)での貿易自由化交渉、APEC(アジア太平洋経済協力)やOECD(経済協力開発機構)においては我が国提案のプロジェクトを担当し、英語もままならなかった私が月1回のペースで海外出張する多忙ながらも大変刺激的な1年を過ごしました。担当が互いの国益を背負って交渉に臨む貿易自由化交渉の現場において、我が国の主なミッションは、高経済成長を続ける発展途上国において我が国情報通信産業の国際展開を後押しするため、海外市場参入の際に障壁となる法規制の緩和や撤廃を要求することです。今年中には世界第二位の経済大国という地位を中国に明け渡してしまうであろう我が国経済にとって、国際展開により海外の成長を取り込むことが不可欠であり、特に成長著しい情報通信分野は、国際競争力を強化し今後の我が国経済成長の主要なエンジンとなることが期待されています。

上述の業務は私が転職する前に期待した①、②を満たす仕事であり、総務省を目指した決断は間違っていなかったと確信しています。他方で、普段の基本的な業務(上司への報告、他部局との調整など)については同じ「組織」という枠組みで働いている以上、民間企業とそれほど異なりません。民間企業で活躍されている方はおそらく公務員としても優秀な能力を持っているでしょうし、逆もまた然りです。したがって、あまり「公務員」「民間」という線引きをせずに「一社会人」としてどのような仕事に携わりたいのか、自分の頭で一度整理してみることをお勧めします。

■そして今

現在、私は米国ミシガン大学で公共政策学

を専攻しています。非常にInteractiveな授業に圧倒されつつも、世界中から集る学生との議論を通じて更に視野が広がる毎日の中で、国境のない情報通信分野において幅広い国際的な視野(もちろん語学力も)が求められていることを常に意識しながら勉学に励んでいます。同時に普通の授業では新興国を中心にスポットがあてられ、我が国のプレゼンスの低下をひしひしと感じるのも事実です。グローバル化が進み、長期的には世界経済が発展していく一方で、人口減少・低成長時代を迎えた我が国が進むべき方向を、留学という貴重な機会を活用して考えてみたいと思っています。

■たった一度しかない人生だから・・・

これまで、入省後わずか7年足らずで多様で刺激にあふれた経験を積むことが出来ました。X年後、私はどのようなキャリアを歩んでいくのでしょうか。ただ1つ確信を持っていることは、不安よりも楽しみのほうが大きいということ。なぜなら総務省はそれだけ刺激のある大きな舞台を用意してくれるからです。たった一度しかない人生、刺激にあふれた社会人生活を求めるやる気に満ちた皆さんならきっと満足してくれることでしょう。



公共政策大学院(フォードスクール)校舎前にて